

記録

ビデオ

カラー / 42分・22分
(短縮版)・2分(予告編)
日・英語版

■企画

(公財) ポーラ伝統
文化振興財団

■監修

羽田 昶

■協力

国立能楽堂 鍬仙会
宝生能楽堂

河鍋曉斎記念美術館
武蔵野大学能楽資料
センター

武蔵野美術大学美術
館・図書館 白水社
三浦裕子 石本駿輔
松島憲一 大柳久栄
大柳陽一 菅井 玲
吉越スタジオ 浅葉
克己 Arki Co. LTD.

／あるき

写真提供：LMS Co.,
LTD.

撮影：竹下光土（世
界遺産劇場）
万作の会

野村万作から 萬斎、裕基へ

第23回ワールドメディアフェスティバル金賞

2022年教育映像祭最優秀作品賞・文部科学大臣賞

映文連アワード2022ソーシャル・コミュニケーション部門優秀賞

和泉流（いずみりゅう）の能楽師、重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）、野村万作（のむらまんさく）が語る言葉を軸に、万作の歩んできた足跡と、息子である萬斎（まんさい）、孫の裕基（ゆうき）の3代にわたる芸の傳承を記録した。

公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団の、第50作目の伝統文化記録映画として制作された。





和泉流能楽師、二世野村万作は、90歳になった今も舞台上に上がり続ける。磨き上げられた技法の上に円熟味が加わったその芸により、2007年（平成19年）、重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）に認定された。

1931年（昭和6年）、六世野村万蔵の次男として東京に生まれた万作は、戦後、狂言に軸足を置きながら様々なジャンルの舞台に挑戦し、自分のルーツである狂言の持つ底力を再認識した。さらに、海外公演でも狂言が世界で通用することを実感し、伝統芸能「狂言」の普及につとめていく。

数ある狂言の中でも秘曲といわれる演目『釣狐（つりぎつね）』を、万作は26回も演じている。中でも『袴狂言 釣狐（はかまきょうげん つりぎつね）』は、大きな話題を呼んだ。

万作の家では、演目『鞆猿（うつぼざる）』で初舞台を踏む。万作、萬斎、裕基ともに3歳で、子猿役を演じた。

狂言のわざの伝承は、「舞、語り、謡（まい、かたり、うたい）」という基本を伝えていく。『名取川（なとりがわ）』での舞を、孫の裕基に指導する万作。『那須与一語（なすのよいちかたり）』の稽古では語りを、『水汲（みずくみ）』では、狂言の謡の中でも「ゆり」という特徴的な抑揚をもつ謡を、萬斎が裕基に厳しく指導する。『柑子（こうじ）』では、太郎冠者（たろうかじゃ）役の万作が、3つ目の柑子を食べてしまった理由を主役の萬斎に述べる場面で、台詞（せりふ）から語り、語りから謡へと見事に変化する。

こうして父から子へ、子から孫へ、狂言の技は受け継がれていく。一つの所作、一言の台詞を丹念に磨き直し、狂言の魅力を伝え続けてきた野村万作。万作の狂言の道はまっすぐに続いていく……。

スタッフ

- 製作
 - 山本孝行
 - 山田三枝子
- 脚本・演出
 - 土井康一
- 脚本協力
 - 村山正実
- 演出助手
 - 細矢知里
- 撮影
 - 山屋恵司
 - 今野聖輝
- 撮影応援
 - 中井正義
 - 藤原千史
- 照明
 - 野本敏郎
- 録音
 - 河崎宏一
 - 藤林 繁
- 編集
 - 石井香奈江
- 音楽
 - 坂田 学
- 録音スタジオ
 - アオイスタジオ
- 編集スタジオ
 - IMAGICA EMS
- ナレーター
 - 田中敦子
- 出演
 - 野村万作
 - 野村萬斎
 - 野村裕基
 - 石田幸雄
 - 野村太郎
 - 深田博治
 - 高野和憲
 - 月崎晴夫
 - 竹山悠樹
 - 岡 聡史
 - 中村修一
 - 内藤 連
 - 飯田 豪
 - 石田淡朗
 - 野村遼太
 - 笛：松田弘之
 - 小鼓：森澤勇司
 - 大鼓：國川 純